

常照

第833号

仏教の儀式では必ず「合掌」があります。なぜ合掌するのですか？

真城 義磨

合掌は、インド起源の挨拶・礼拝の仕方です。相手と真向かいに對面して、両手の手のひらを胸の前で合わせ、頭を下げます。敵意がないことを示し、相手への敬意を表すしぐさです。現在のインドでは、朝でも日中でも夜でも、出

会ったときは合掌して、「ナマステ」と言います。(ほかにもアジア諸国に合掌の習慣があります)また、世界中で、僧侶や仏教徒は仏への帰依や尊敬の形として、礼拝をする際に合掌します。

インドでは人間の右手は清らかさとか神聖の象徴とされ、左手は不浄を代表すると考えられましたので、その両者を合わせることは、清濁(せいだく)・善悪・好悪(こうお)・正邪等のどちらか一方を演ずるのではなく、両者を内にもつありのままの自分で相手にお会いするということになります。自分の中にある素直で明るく澄んだ面と、濁った邪悪な恥ずかしい面と、どちらも持ち合わせていることに気づいて、それぞれをよ

く見つめてそういうものをかかえた自分をちゃんと認めたくえで、今出会っていることに遭遇（であ）い直すことが大事です。

様々な宗教において、胸の前で両手を合わせるがあります。指を交互に組む形もありますね。実際に胸の前で合掌してみると、リラックスして、何ともいえない安心感のようなものを感じませんか。心臓をはじめとする身体にとっての大事なところを守るといってはたらくきもあるのかもしれない。また、両手の平を合わせることで、身体の左右の電荷（イオン）のズレが解消され、バランスが良くなるということもあるそうです。私たちは、お墓やお内仏（お仏壇）の前で合掌しますし、食卓

では食前・食後に合掌します。また、謝るときや頼みごとをするときにも合掌することがあります。

人間の営みを超えた何かに出会ったとき、目には見えない働きを感じ、感謝せずにはいられないようなときに、思わず合掌することがあるのではないのでしょうか。当たり前でなかつたのだと。また、お内仏やお墓の前で合掌すると、亡き人と会話ができるような気がしますね。あるいは、忙しい日常生活に紛れて見失っていたことや、忘れていた我に帰って冷静に自分を振り返ることができます。自分のうちにある相對する思いや感情・心の傾きを、どちらに傾くのではなく、ありのままの素直な自分として、合掌する機会を大切にしたいものです。

正信偈の中に出てくる

「分陀利華（ふんだりけ）」とは、
何の花なのでしょうか？

答 蓮

「分陀利華」とは、インドで、
白い蓮の花を意味する「プリンダ
ーリカ」という言葉の発音に漢字
を当てはめた音写語です。インド
では、蓮の花は古くから大切にさ
れてきました。浄土真宗の寺院に
おいても、荘厳される仏具などに
蓮のデザインが多く用いられてい
ます。

親鸞聖人は、「正信偈」において、
如来の誓願（せいがん）を聞信
（もんしん）するすべての凡夫を
「分陀利華と名づく」と言われて
います。蓮は「泥より出でて泥に

染まらず」と言われるように、き
れいな陸地ではなく、泥の中から
美しい華を咲かせます。このすが
たから、煩惱にあふれている濁世
（じよくせ）の中で教えに出遇つ
た人を「分陀利華」と表現されて
いるのです。

（人中の分陀利華なり）

蓮はその花言葉にもあるように
清浄とか純潔を意味するそうです。
私たち人間の思いや、はからいが
混じらない、誰かの思惑も利権も
挟まないという事、だからこそ清
浄で純潔なのです。

仏壇の中の掛軸をよく見てくだ
さい。阿弥陀さまは蓮の花の台座
の上にいらっしやいます。うちの
掛軸は文字だという方もいらっし
やるでしょう。南無阿弥陀仏の名
号も同じく蓮台の上です。仏さまの

足元を飾るといふことは尊い、清らかであるといふこと、蓮の花はそれを教えてくださるのです。

そして浄土真宗の依りどころとなるお経、浄土三部経のひとつ仏説観無量寿経には「もし念仏する者は、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり」といふ言葉がでてきます。煩惱の泥の中から悟りの花が咲く。お念仏を喜ぶ人はそれほど尊いといふことです。それほど尊いですが与えてくださったのは阿弥陀さま、気づかせてくださったのは…どなたですか？住職ですか？親ですか？お互いが立派になるわけではなく、やっとなげかかせていただいたこのことに感謝し、合掌し、お念仏です。

六月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 六月七日(水)～十一日(日)

山陰教区 邑智東組 眞清寺

講師 瑞光 倫浩 師

○後期 六月十三日(火)～十六日(金)

熊本教区 託麻組 良覚寺

講師 吉村 隆真 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、
ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気
実施の上、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (011) 341-0744
FAX (011) 341-0808
テレホン法話 11-161-6161